
電波恋愛

愛夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電波恋愛

【Nコード】

N75470

【作者名】

愛夢

【あらすじ】

これは電波で繋がった恋の物語。いけないと分かっていても好き。実話を元にした切なく甘いストーリー。

今日は元旦。

おせち料理やお正月番組など色々楽しい時期だ。

私の名前は渡辺愛莉^{わたなへあいり}。

今年の4月で中3になる。

毎年年越し年明けはお婆ちゃんの家で過ごしていた。

今年もそう。

でもお婆ちゃんの家は田舎…

正直暇な時が多い。

カラオケボックスやデパートもない。

暇潰しするなら遠出するしか暇は潰せないし

私は携帯を持っていない。

だから手軽に携帯ゲームサイトなども行けない。

たった一つの暇潰しはパソコンだった。

けれどパソコンに触るのは一ヶ月に1、2回くらいしかない。

今日はあまりに暇だったのでパソコンを開く事にした。

パソコンでは主にメールをしていたりゲームをしていたり。

「メールでもしようかな…」

ぼそつと独り言を言う私。

けど元旦に暇な人はいないだろうと思いきやメールはやめた。

あ、そういえばチャットって面白いって友達が言ってたなあ…

少しやってみようかな…

そんな軽い気持ちでチャットサイトを検索し一つのチャットルームに入った。

そのスレッドの名前は…

『無題』初心者歓迎』

これがあなたとの出会いだっ
た。

1 - 1 (後書き)

感想やアドバイスなどありましたらよかったら書き込みください。

「無題…？でも初心者歓迎なら優しくしてくれるかも…」
そんな独り言を言いながらスレッドに姫衣めいというHNで入室する。
ハンドルネーム

「こんにちわー」

<あ、こんにちわ^^お初です >

今思った事。

優しそうな人だなあ…

これが第一印象。

「初心者ですがよろしくお願いします！」

<いえいえ！初心者さん歓迎ですから >

かたつくるしい私の挨拶でも彼女は柔らかく返してくれる。

「ありがとうございます チャットって基本何をすればいいんです
ようか？」

<あ、タメ口でいいですよ^^ 主に雑談とかですよ >

「それじゃあタメで そつちもタメオツケーだよ！」

<そうか？じゃあ俺もタメで >

…俺！？

この人男だったの！？

てつきり私は女かと思ってた…

「あ、うんっ 女かと思っちゃってた」

<なんだそれwww >

ネットってやっぱり化けるんだなあ…

…っていうか『w』って何？

何がなんだかさっぱり…

でもこの人と話してるとすごく楽しい。

私は毎日この人と話していた。

依存症と言われてもいいくらいに。

でも楽しくて、パソコンにも慣れ、タイピングも早くなり、

用語も分かるようになった。

他の入室者もいたのでたくさんの人と仲良くなれた。

毎日楽しくて今年の冬休みはあつという間に感じた。

1 - 2 (後書き)

感想やアドバイスがありましたらよかったら書き込みください。

あつという間だった冬休みが終わり、中2最後の二学期が始まった。重い足取りでいつもと同じ景色の通学路を歩く。チャットができないので少々苛々する。

…完全に依存症じゃん。

無題のチャットルームの主さんは竜雅さんって名前なんだって。

「おーいつ愛莉いーっ」

誰かに呼ばれ振り返る私。

「ん…？ああ、蓮か。」

「なんだよ、その期待はずれみたいな言い方」

まるで子供を扱うように私の頭をくしゃっと撫でる。

この人は須神蓮。

私の幼馴染。

顔立ちは整っていてモテる。

「べっつに〜？」

蓮に向かってにこつと笑う。

蓮も私に向かってにこつと笑ってくれた。

まるでどこかのカップルのように。

「お二人さん仲いいね」

この子は東美優。

見た目も性格もお姉さんで話しやすい。

良き相談相手でもある。

この3人はいつも一緒にいる。

「だって俺ら幼馴染だもんな」

「え？そうだっけ？」

「愛莉、ひでえよっ」

「はいはい、漫才はこれで終了」

こんな私たちに美優は突っ込みを入れる。

私の日常はこんなに平凡な暮らし。

そうこうしている内に学校に着いて教室に入る。

私たちは全員で組。

美優とは同じクラスになってから仲良くなった。

「おっはよ」

元気でノリの良い蓮はクラスで人気だ。

特に女子はきゃーきゃーうるさい。

「須神君おはよっ」

今日も女子達が蓮に寄っていく。

「なんであんなに人気なのかねえ……」

「まあかっこいいし性格もいいからね」

「美優は蓮に惚れたりしないの？」

「ん？私は年上がタイプだから」

……さすが美優。恐るべしっ！

キーンコーンカーンコーン……。

この音でぞろぞろと自分の席に戻る生徒たち。

でも近くの席の人と話しているのでざわざわうるさい。

がらがらつと音をたてて開く教室のドア。

「はい、日直。」

先生が挨拶の合図を出すと教室がいつきに静かになる。

「……」

「日直！……渡辺！」

……ああ、私か。

「きりーっ。きょーっけえー。」

「おはようございます。」

「はい。おはよう。」

先生が今日の事など話している。
私は外を向いていた。

「ばいばい」

「また明日ね」

やっと放課後。

「愛莉」

「美優」

私は美優に抱きつく。

休み明けの学校ってなんでこんなにしんどいんだろう。
特に私の学校は休み明け一日目でも授業がある。

「あー、よしよし」

美優は私を撫でた。

「お前こんくらいでへばってんのかよ」

「蓮は寝てたからね」

蓮に向かってべーっと舌を出す。

「須神君っばいばいっ」

一人の女子が蓮に手を振る。

「おー、じゃあな」

にこつと笑い手を振り返す蓮。

きつとこの笑顔に女子達は落ちるんだろう。

そしていつものように私、蓮、美優の三人で下校する。

「それじゃあまた明日ね」

美優とは家が遠いので途中で別れてしまう。

蓮と二人で帰り家の前まで来る。

「んじゃ明日ね」

「おう！」

蓮とも別れ、家に入る。

自分の部屋に入りベットに横になる。

1 - 3 (後書き)

感想やアドバイスがありましたらよかったら書き込みください。

すくつとベットから起き上がり着替えをする。
てきとーに動きやすい服装を選んで机の前に座る。

目指すはパソコンの起動ボタン。

”ポチツ…ウイーン”

心地よい音が鳴りパソコンの熱が風となって私にあたってくる。
パソコンが立ち上がりインターネットを繋ぐ。
慣れた手つきであのチャットルームを開いた。

1ヶ月も経ってないのによくここまで慣れたなあと自分でも思う。
あの頃分からなかった『W』の意味は『(笑)』の省略なんだって。

カタカタツ。

リズムカルに文字を打った。

「来たよー」

<おー、姫。ばんわー^^>

姫とはネット上での私のあだ名。

姫衣という名前に『姫』と入っているからとわがままだからと言われた。

「今日は竜一人だけ？」

<俺だけじゃ気に食わないって？ww>

「そんなことないよww」

こんな普通な話が私にはすごく楽しかった。

<そうか？>

「ホントだつてばあ」

<お前妹みたいだなw>

「んー、そう？つてか妹いたんだw」

<いねえよw俺は一人っ子。なんか妹っぽいからさ>

「ふーん…。じゃあ竜兄だねっ」

この頃だったかな。

あなたに少し近づけたのは。

でも、そんな期待もいつきに崩れるなんて。

こんなにも自分の中のあなたの存在が大きかったなんて。

私はこれっぽっちも思ってたよ。

1 - 4 (後書き)

感想やアドバイスがありましたらよかったら書き込みください。

<つと…もうこんな時間か。俺そろそろ寝るから落ちるな？>

竜の言葉でバツと時計を見る私。

時刻は深夜の0時を回っていた。

時間を忘れるほど楽しいってこういう事か。

「わっ、ほんとだっ。私も落ちなきゃだ…じゃあまた明日ね、竜兄」

<俺のあだ名それになったのかよwwwん、じゃあな>

竜雅さんが退室しました。

姫衣さんが退室しました。

パソコンの電源を切り、ベッドに横になった。

「やば…宿題やってないし…」

ぼそつとつぶやいた途端に睡魔に襲われる。

私は宿題をやらなままやすやす寝てしまった。

「愛莉ー。朝だから起きなさいー！」

母の大声で目が覚める。

「ん…ふああ…」

大きな欠伸をし、パジャマのまま居間へと向かう。

朝ごはんのいい香りがする。

自分の椅子に座り、少し寝ぼけた声で「いただきます」を言い食べ始めた。

「愛莉おはよう。」

「ん…おはよう…」

いかにも寝起きですという声で挨拶をする。

朝が弱い私は無言でご飯を食べる。

箸でから揚げをつまみ口へ運ぶ。

朝ごはんを食べ終え自分の部屋で制服に着替える。
歯を磨き髪を梳かす。

上着を着て、マフラーをし、かばんを肩に下げ、玄関へ行き「いつてきます」と告げドアを開けた。

「寒っ！」

今日、外に出ての第一声。

「お、愛莉いー」

「蓮おはよお。寒いねっ」

「そうか？」

…あれ？

蓮、鼻と耳が真っ赤…。

もしかして外で待つててくれたの？

「蓮、外で待つてた？」

「ん…まあな」

「家に入ってよかったのに…」

「だってビツクリさせてえだろ？」

蓮はにかつと笑う。

「もう…風邪ひくでしょーっ」

私は頬を膨らませ拗ねたフリをして先に歩き出す。

「わりいわりい。心配どうもな」

「心配なんかしてないし〜」

「そうですか」

蓮はふふつと微笑んで私の頭を撫でる。

普通はここでだいたいの女子が恋に落ちるだろう。

でも私と蓮は幼馴染だから、こんなの日常茶飯事。

昔っから私が拗ねたり怒ったりすると蓮は私の頭を撫でる。

するとなぜか「まあいっか」という気分になる。

でも正直、他の女子達にどういいう目で見られているか不安なだけで

ど…

蓮と一緒に登校していると美優の後姿が見える。

私は走って美優を追いかける。

「美優」

「あ、愛莉！おはよう」

微笑む美優。

すごく大人っぽい笑顔…。

「よっ、美優」

「あ、蓮もおはよう」

挨拶を交わし三人で登校する。

ここらへんに来ると通ってる学校の生徒が増えてくる。

友達などに挨拶をし、学校に着く。

今日もまた平凡な一日になりそうだ。

1 - 5 (後書き)

感想やアドバイスなどありましたらよかったら書き込みください。

今はお昼休み。

5時間目は地獄の数学…。
すぐくだるい。

そこで蓮が提案したこと。

「三人でさぼらねえ？」

「賛成！大賛成！」

「ちよつとまずいんじゃないかな？」

真面目な美優は反対気味に言う。

「たまにはいいよ」

「そうそう！」

私と蓮は美優を説得する。

「ん…まあいつか」

何か吹っ切れたように美優はOKをする。

上着を着て、かばんを持つ。

蓮がクラスの子に

「俺らさぼるから」

と自信満々に告げる。

皆はポカーンとしながら私たちが教室を出るのを見送っていた。

そして先生に見つかからないようにそつと抜け出す。

このスリル、緊張感がまた楽しい。

「こら、その三人！」

…見つけた。もう終わりだと思ったその時。

「やばっ、皆走って！」

予想外に美優が指示を出した。

美優の言葉に驚きつつも三人全力で走る。

走ってる途中先生が「待てえええ〜！」と言いながら追いかけてきたのがあまりにも滑稽で思わず笑ってしまった。

学校が見えなくなった時三人は足を止め、大声で笑いあつた。

「先生のあの必死の顔見た!？」

「見た見た!あれは面白すぎるっ!」

「もつめっちゃ楽しい!」

息を切らしながらも楽しそうに。

「まさか美優が逃げろって言うとは思わなかったよ」

「俺もビツクリした」

「だって普通に頭下げて謝ったらシラけるでしょ?」

美優:それはものすごく正しい選択だ。

瞬時に判断できる美優はある意味すごいなあ。ある意味。

「んでこの後どうする?」

「とりあえず座りたーい!公園行こっ」

「んじゃ行くか」

三人で近くの公園へ行く。

やけに静かな公園は少し切ない。

いつものようにちっちゃい子たちが遊んでないから、うるさくはな

いのだけど…

でもなんだか切ない…そんな感じ。

「よいしょつと…」

三人でベンチに座る。

このままどうしよっかなあ…そう考えている。

「とりあえず遊ぶかーっ」

子供のようにはしゃぐ蓮。

「んじゃどっかカラオケでも行きますか!」

私の地元はまあまあ都会。

必要なものはだいたい全部揃ってる。

「賛成〜!」

ということでカラオケに行く事になった。

カラオケ屋に着き何時間歌うかを決めた。

ガチャツ。

個室の入り口のドアを開けると独特な匂いがする。この匂いに包まれながらふかふかの椅子に座った。

「歌うぞーっ」

蓮が張り切ってマイクを握る。

ノリ…いいなあ。

人見知りな私はこういうときは進んで歌えない…。

友達が2、3曲歌った後初めて歌うタイプだ。

その後何曲か歌い、あつと言う間に楽しい時間は過ぎていった。

プルルルルルル。

終わりの音が鳴り響く。

会計を済ませ、外へ出る。

「んじゃ帰つか」

「そうだね」

「ごめん、私帰り道反対方向だつ。じゃあまた明日ね！」

美優は反対らしい。

「おう。じゃーな」

「またね！」

別れの挨拶をし、蓮と二人で歩き出す。

二人供疲れたのかあまり会話がなない。

いつも明るい蓮だからなんだか不安になる…。

「明日先生に怒られちゃうかな？」

私は沈黙に耐え切れず話を振る。

「怒られるだろうな」

「三人一緒なら怖くないけどね」

「そうだな」

蓮はクスツと笑い…また沈黙。

帰り道がやけに長く感じる。

「あ、俺今日親いねえからコンビニ寄ってくけど一緒に行くか？」

沈黙が続くなんて耐えられる自信がない…。

「ごめん。今日は早く帰んなきゃなんだあ」

私は軽い嘘をつく。

こんなの無理矢理だっと思って思うけど。

「そっか…じゃあこのまま帰るか？」

「うんっ」

「送ってやれなくてごめんな？んじゃまたな」

「ばいばい！蓮も気を付けてね！」

…なんだか罪悪感。

そんな気持ちを抱えながら家に帰る。

「ただいまあー」

疲れきった声が家に響き渡った。

1 - 6 (後書き)

感想やアドバイスなどありましたらよかったら書き込みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7547o/>

電波恋愛

2011年10月8日04時59分発行